

こころの大掃除

永田円了

～ 仕合わせの証し ～

Happiness Only Real When Shared

12月は大掃除のシーズン、ちょっと油断するとガラクタは溜まる一方である。ガラクタとは、もう必要としないもの。ガラクタとは、捨てたいと思っているのだけど、なかなか捨てられないもの。ガラクタとは、それ自身がさらに濁ったエネルギーを呼び集めるもの。ガラクタとは、エネルギーの停滞であり自分自身の人生の状態を示す症状の一つである。

過去の記憶はエネルギーとして蓄積される



私たちの人生のあらゆる瞬間、あらゆる知的、感情的、肉体的活動、あるいは休息さえも、その全てが記録されている、とキャロライン・メイスは言う（メイス著『七つのチャクラ』より）。

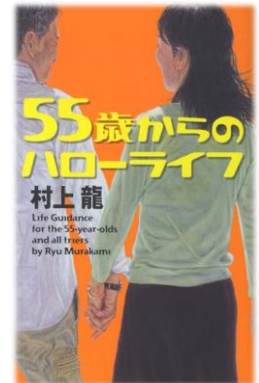
エネルギーをチェックしてみよう。あなたの過去の記憶は、果たしてエネルギーを与えてくれるものなのか、それともエネルギーを奪っているものなのか。心をスキャンして、そこに蓄積されている記憶が、マイナス・エネルギー（ガラクタ）であるなら、遠慮なく捨て去ろう。えい！と思い切って、潔く捨てよう。心の大掃除には、思い切りが必要なのである。

55歳からのハローライフ「結婚相談所」

エネルギーの停滞に我慢しきれず、30年間連れ添った夫に別れをつげる志津子。自分を変えたい、との思いから結婚相談所に登録、6人の熟年男とお見合いをする。セックスばかりに関心のある男、マザコン男、墓参りに誘う男、割り勘男、IT企業の男、そして山歩き男、どの男も再婚を決断するまでには至らない。

そうする中、「会いたい、何とかよりを戻すことはできないか」との元夫からのメール。志津子は、公園で元夫を会うことに。そして元夫に告げる。「さみしくて、人に甘えるようにはなりたくない」「やり直すことと、元に戻ることは違うと思うの」。志津子の意識は、お見合いした男たちとの経験を通して自立していた。

煮え切らない元夫を後に、彼女はつぶやく。「人生で最も恐ろしいことは、孤独ではなく、後悔と共に生きること」と。結婚相談所とは、その後も誰かとの出会いを求めて通うことに。自立した女として。



見えず聞こえずとも



全盲ろうの久代さん（64）と結婚して14年、夫の梅木好彦さん（67）は、触手話でお互いの意志を伝えあう。結婚前、自給自足の生活を志して始めた農業、思いは達するが何か足りない。誰かのお役に立ちたい・・・。

阪神・淡路大震災でのボランティアを機に、久代さんと知り合い結婚。見えず聞こえずの世界に居ながら自立している久代さん、毎日の洗濯に弁当作り、むしろ彼女のほうが好彦さんを引っ張っていている。好彦さんは言う「人間としての幸せを教えてもらったのは、むしろ私の方です」。

「仕合わせ」とは Share なり；「仕合わせ」とは、「する」と「合わせる」が一緒になったコトバ。共に何かをすること。結果が幸か不幸かを表す言葉ではないのである。前述の二つの事例、共通しているのは、志津子さんも、全盲ろうの久代さんも、自立していること。自立しながら、誰かと何かを共にすること。仕合わせの証しはここにあり。

<事例 DVD>

村上龍作「55歳からのハローライフ」第三話『結婚相談所』
Eテレ・ブレイクスルー「見えず聞こえずとも・・・」
チャールズ・ディッケン作「クリスマス・キャロル」
歌・中島みゆき「糸」

円了のホームページ：www.enryo.jp

